

【はじめに】

「ゴウシュイモ」は、徳島県内の三好市やつるぎ町の山間部で栽培されている在来ジャガイモの呼称の一つであり、塊茎の皮色が赤と白の系統がある。

長さ5cm前後、重さ20g～50gのやや小型のイモの割合が多く、煮崩れしにくい特徴と粘り気のある食感、「男爵薯」や「メークイン」などの市販品種にはない旨味があり、「味噌炒め」や「でこまわし」などの郷土料理の食材に用いられている（図1）。

その一部は三好市祖谷地区に残る平家の落人伝説にあやかり、地域ブランド名「源平いも」の名称で市場や直売所等に出荷・販売され、生産者にとって貴重な換金作物となっている。

しかし、生産者の高齢化や離農にともない生産量が激減するとともに、耕作放棄地の増加は地域の衰退にもつながっている。

そこで、地域の貴重な農産物資源「ゴウシュイモ」の生産量の回復を図るため、生産量が最も多い阿波みよし農業協同組合（以下「農協」と略記）管内の生産から販売にかかる現状を調査し、これらに係る課題を抽出した。

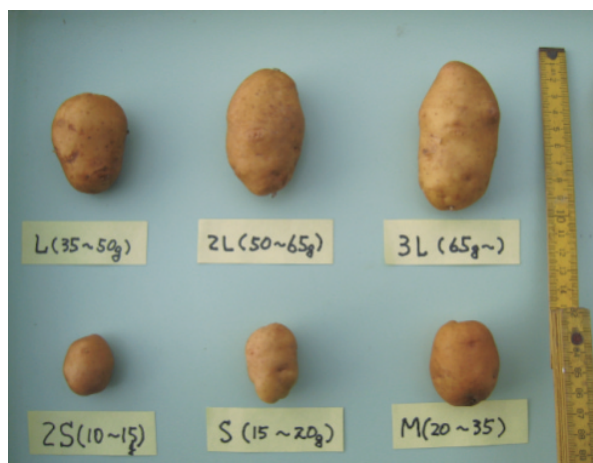


図1 「源平いも」の農協出荷規格

【調査方法】

農協ゴウシュイモ生産部会（以下「部会」）の生産に係るデータ収集と、農協担当者および主産地の東祖谷地区の部会員を対象に生産から販売に係る技術や手法について聞き取り調査を行った。また、収穫物について品質調査を行った。

【調査結果】

2014年度の生産状況は、2011年度に比べて、部会員数は3戸、栽培面積は17a、集荷量は約900kg減少していた（表1）。

2014年7月末の東祖谷地区の部会員数は11戸、栽培従事者数は16名であり、60歳代が1名、70歳代が6名、80歳代が9名であった（データ省略）。

聞き取り調査および品質調査結果を分析し、次のような問題点や課題を抽出した。

○既存生産者の減少を補う新規生産者の育成。

○生産者の高齢化により確保が困難になっている圃場の土壌保全や土づくりに用いられるカヤに替わる軽量で安価な土づくり資材の探索や開発。

○圃場でのそうか病や乾腐病等の病害の適正防除、および貯蔵庫内での蔓延を防ぐための罹病イモの除去の徹底。

○出荷量を増やすための庭先集荷時の選別基準の再周知。

○視力の衰えた高齢生産者に対する乾腐病罹病イモの発病初期の選別方法の指導。

○販売単価の低い2L、3L規格の大きなイモの新たな活用方法創出と、業務関係者や消費者への宣伝活動の実施による生産者の収益増大。

表1 ゴウシュイモ生産部会の年度別生産状況

年度	2010	2011	2012	2013	2014
部会員数（戸）	13	18	17	16	15
栽培面積（a）	—	127	120	120	110
集荷量（kg）	3,238	4,607	3,867	3,896	3,694
（内訳）白イモ	1,593	2,331	2,678	2,997	2,669
赤イモ	1,645	2,276	1,189	899	1,025

注）阿波みよし農業協同組合同山支店の取り扱い実績から作成

【おわりに】

今回の調査で、「ゴウシュイモ」の生産から販売に係る諸課題が明らかになった。

今後、関係機関と連携してこれらの課題解決に向けての対応策を検討・提案し、本県西部山間部の貴重な換金作物であり、郷土料理の食材として観光産業にも貢献している「ゴウシュイモ」の生産量の回復を図り、生産者や観光業者等の収益向上、ひいては地域の活性化につなげたいと考えている。

（経営研究課 経営担当 高木 和彦）